

【表紙シリーズ】

房総の森ときのこ その2

「イヌシデ・コナラ林のきのこ」

吹春 俊光

千葉県に見られるきのこを林別にわけると3つに大別することができます。まず人為の影響の無かったところに房総半島に広がっていた「シイ・カシ林」にみられるきのこ。その林を伐採したあとに生えてきた二次林である「マツ林」のきのこ（33号、93-97頁）、そして同様に二次林である「イヌシデ・コナラ林」のきのこです。イヌシデはカバノキ科クマシデ属、コナラはブナ科コナラ属に属し、ともに外生菌根菌と共生する植物です。

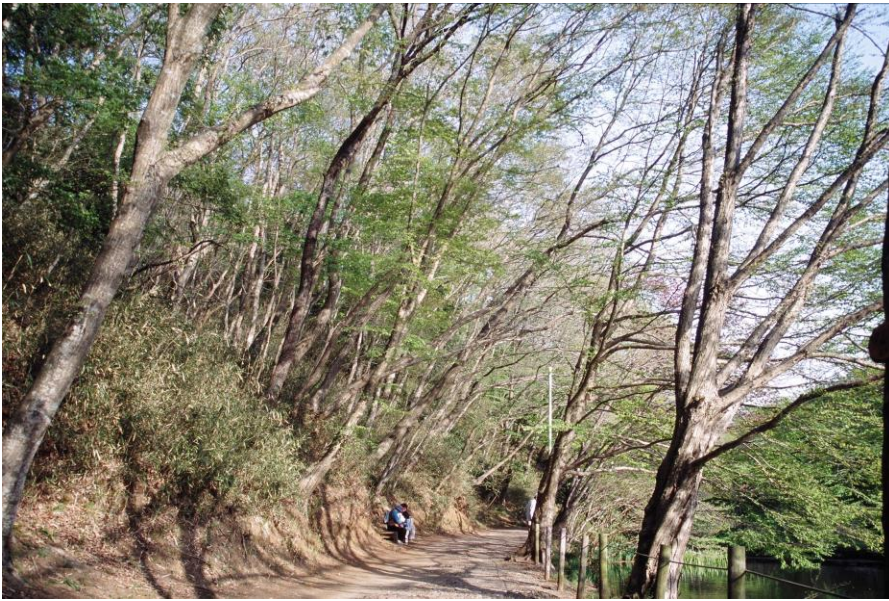
マツ林もイヌシデ・コナラ林も、放置すれば、100年後くらいには、元のシイ・カシ林にもどる不安定な林です。しかし建築材や薪炭材を得るために、どちらの林も里山林として、江戸時代頃から何百年も人為的にコントロールされ維持管理されてきました（33号、

93-97頁参照）。不安定であるはずの林が、人為的に、安定的に管理されてきたのです。その結果、これらの二次林が広く房総半島にひろがり、それぞれの林に特有の外生菌根菌が発生することになり、それらの外生菌根菌が身近な里のきのこ、ということになっていきました。

千葉でイヌシデ・コナラ林が見られる場所は、「谷津」とよばれる谷と台地が入り交った縄文海進が刻んだ地形のある場所でした。かつてはシイ・カシが生えていた、谷津の低地の水田と台地の上の畑をつなぐ斜面ですが、ここを薪炭林として、また堆肥のための落ち葉をあつめる林として、人は二次林をイヌシデ・コナラ林に仕立てることにより、里山として利用してきました。現在では、炭も薪も



谷津の斜面にひろがるイヌシデ・コナラ林（千葉市・平山町）1987年4月



イヌシデ・コナラ林
(千葉市・泉自然公園)
2005 年 4 月

必要とせず、山菜などの里山からの恵みを利用することもなくなり、里山が活用されなくなった現在では失われつつある林です。しかし、北総の谷津地形のところどころに、まだ昔風のイヌシデ・コナラの林が残っているとこがあります。また、千葉市内の泉自然公園など、かつての谷津地形を利用した公園では、現在でも下草刈りなどの手入れをして管理をおこない、イヌシデ・コナラ林を維持しているところもあります。また最近、「〇〇の里山を守る会」のように、放棄された二次林を、かつての里山のように維持する活動も盛んになり、そんなところにもイヌシデ・コナラ林をみることができます。

コナラの外生菌根菌としては、表紙で紹介したタマゴタケ、ヤマドリタケモドキの他、



イヌシデ・コナラ林 (千葉市・園生市民の森) 1994 年 9 月

ムラサキヤマドリタケ、イロガワリなど、沢山の食べられるきのこが見られます。また、ウスキテングタケやドクツルタケなどの毒きのこもみられます。一方、イヌシデ林からは、表紙で紹介したスミゾメヤマイグチ、ヒロハシデチチタケなどがみられます。

私が関西から、関東にやってきたときに、シデ類が混じる平地の里山林にスミゾメヤマイグチを見つけたとき、本当にびっくりしました。関西ではこの種類は「山地」のきのことして、結構珍しい種類だったからです。というのは、関西では、ブナ帯と平地の間、標高 500m 前後の、シデが混じるコナラ林などの山地で見かけるきのこがスミゾメヤマイグチだったのです。結構な珍菌でした。それが千葉では「平地」に出ていることに驚きました。

その後、千葉の里山であるイヌシデ・コナラ林できのこを採るようになり、同様に関西では珍しかったヒロハシデチチタケも見られることを知り、同じ里山の雑木林でも関西と関東ではずいぶん違うな、と思ったことを思い出します。

今回、裏表紙で紹介したイヌシデ林と共生する 2 種は、千葉のイヌシデ・コナラの里山林を特徴づけるきのこ、ということができるでしょう。

【イヌシデ・コナラ林のきのこ図鑑】

●タマゴタケ（テングタケ科テングタケ属）

Amanita caesareoides Lj. N. Vassiljeva

千葉県ではコナラ林などブナ科の林にみられる外生菌根菌で、優秀な食用きのことして知られています。テングタケ属には珍しくヒダが黄色いという特徴があり、他のテングタケ属の種類と区別することができます。類縁種にキタマゴタケ、チャタマゴタケがあり、ともに黄色いヒダをもっています。

タマゴタケの学名は、これまでいくつかの変遷を経ています。最初は、欧州のセイヨウタマゴタケの学名 *A. caesarea* で 1900 年に紹介されました（根田，2012）。その後、柄にまだら模様があるという特徴などから、スリランカで記載された南方系の *A. hemibapha* の学名が採用されていました。そして最近になりロシア産のタイプ標本と形態学的・分子系統的に一致するというので、*A. caesareoides* となりました（Endo et al., 2013）。



[文献]

- ・根田仁（2012）タマゴタケの仲間，「おいしいきのこ毒きのこ」，主婦の友社，39 頁。
- ・Endo, N. et al. (2013) In vitro mycorrhization and acclimatization of *Amanita caesareoides* and its relatives on *Pinus densiflora*. Mycorrhiza 23: 303-315.

●ヤマドリタケモドキ（イグチ科ヤマドリタケ属）

Boletus reticulatus Schaeff.

本種も、最初 *B. edulis* とされていましたが、柄全体に網目が見られる等の特徴から *B. reticulatus* とされるようになりました（長沢 1989）。

千葉県ではコナラ林やシラカシ林などブナ科の林に夏から秋に見られる外生菌根菌です。傘の裏の管口は、若いとき白い被膜に覆われた白色で、傘が開くにつれ黄色い管孔がみえてきます。若いものは肉質が緻密で、料理にする場合には、和風よりもクリームやオリーブオイルに合う、本当に美味しいきのこです。



[文献]

- ・長沢栄史（1989）イグチ科，「原色新日本菌類図鑑Ⅱ」，保育社，1-44 頁。

●スミゾメヤマイグチ（イグチ科、ヤマイグチ属）

Leccinellum griseum (Qué.) Bresinsky & Manfr. Binder

肉が空気に触れるとやや黒変し、傘の表面に不規則なおうとつがあるという特徴があり、シデ類（カバノキ科クマシデ属）と共生する外生菌根菌。千葉県ではイヌシデが混じる里山林に見ら

れます。ちなみに、長沢栄史先生が本種を紹介されたときに、欧米のものは4孢子性だが、日本産は2孢子性であると報告されています (Hongo & Nagasawa 1980)。分子系統で調べたらどうなるでしょう。

千葉県では谷津の周辺に見られるイヌシデ・コナラの雑木林に、7月上旬から10月上旬に発生します。千葉県のイヌシデ・コナラの雑木林のきのこを特徴づける典型的な種のひとつです。食べた人の話によると、あまり美味しくないとのことでした。

[文献]

- Hongo, T. & Nagasawa, E. (1980) Notes on some boleti from Tottori V. Rep. Tottori Mycol. Inst. 18: 133-141.



写真：大作晃一（2枚とも）

●ヒロハシデチチタケ（ベニタケ科チチタケ属）

Lactarius circellatus f. *distantifolius* Hongo

本種は本郷次雄先生により京都産の標本をもとに記載された種類で、スミゾメヤマイグチ同様、シデ類が混じるような林に見られる外生菌根菌です。傘の表面には同心円状の環紋があり、湿時粘性があり、ヒダは粗で、乳液は白色、変色せず、辛味があります。

千葉県では、谷津の周辺に見られるイヌシデ・コナラ林に5月から10月まで発生し、スミゾメヤマイグチと同様、千葉県のイヌシデ・コナラの雑木林のきのこを特徴づける種類です。



写真：大作晃一

イヌシデとコナラの樹幹

どちらも不規則な縦じまがあるのが特徴だが、イヌシデの樹皮はなめらかで、うねるような縦筋が入るものが多く、老木になるにつれ割れ目が入るものの浅い。コナラは成長につれ樹皮が縦筋にそって深く裂ける。



イヌシデ（カバノキ科クマシデ属）
Carpinus tschonoskii Maxim.



コナラ（ブナ科コナラ属）
Quercus serrata Thumb.